



## 大遠忌をお迎え申す

深川 倫雄 (ふかがわ りんゆう)

凡そ十年前、御影堂の修復というので、ご真影さまがご動座に成られた。お興に召されたお姿を拝しました。御影堂の屋根を覆う大きな仮屋根が葺かれ、十年後には旧に復するということでした。

七十才半ばの身として、十年後のご復座のお姿はおろか、御影堂の仮屋根が外されて、新しい大屋根を見ることはあるまいと諦めました。仮屋根、空き屋のご影堂が見納めかと、悲しくもありました。ところが平成十九年正月、見事な大屋根のお姿を、生き得て拝することが出来ました。新報の第一面が輝かしく見えました。

五十年前の七百回忌は昭和三十六年に営まれました。阿弥陀堂を仮御影堂とし、その須弥壇上にご真影さまはお坐りになりました。この度のご修復は大仕掛けのようです。ご修復功成って、何もかも輝くようになった御影堂にお還りになったご真影さまを拝したいものです。十年は永い、十年は永いと思っっているうちに、あと三年になった。「ご開山聖人さま、ご修復が終わりました。清々しい御影堂へお還り遊ばしたまえ」という日も近いであろう。お待ち受けの想いや頻りである。

五十年も前に「廟堂頌」という組曲の合唱を聞いたことがある。作詞は長田恒雄という。龍谷混声合唱団の演奏であった。第一曲は「大屋根」。

ほの暗き光は淀み み明の影も寂けく  
燻ゆる香の ころろ深し  
群参の人の声々 称名の波立つ声々  
その声はうねり撚りつつ 上り立つ柱の如く  
あわれかの御影の堂の 大屋根を高く支えて  
群参の人々の模様を尊く有難く詠ってある  
第二曲は「寂かに」。

御厨子の奥の暗がりに、ああ今日も祖師は寂かに  
白き御数珠音もなく しみじみと寂かに在す  
湧き上がる称名のしぶきの中に ただ寂かに  
ああ今日も祖師は寂かに 常の如  
祖師は寂かに在します

この作詞者は何とも有難い詩を詠って下さったものだ。今は総御堂にお寂まりのご真影さまを拝する度に、ご修復の早々の完了と、ご真影さまの還御を思うこと切である。

お還りになったら、お厨子の奥の暗がりに寂かに在しまして欲しいので、電照は程々にしてもらいたい。昔の本願寺歳時記は記す。年の暮、ご門主さまがご真影さまのお身拭いをなす。その間にお裏さまが、お堂の背後の真実閣で「白き御数珠」の白い房一御流麻を新しくお替えになると。念仏者を挙げて敬慕し奉る祖師聖人である。寄せる波が磯に砕けしぶきがあがる。怒涛の遠鳴り、丁度そのような群参同行衆の称名が、ご真影さまを取り囲み、うねりにうねって昇り立つ柱の如く、かのお堂の大屋根を支えて来ました。

あと三年で<sup>だいおんき</sup>大遠忌法要が始まる。あと三年生きていたい。団参の波に揉まれる元気はないけれども、生きて法要の模様をその年に聞きたい、想いたい。まだ三年ある。旧のお座にお寂まりの聖人の正面に坐って<sup>おが</sup>拝みたい。人影の少ない平日に一人でご前にじっとしていたい。なまんだぶ なまんだぶ

ご開山さま、改った御影堂は見事に美しゅうございます。あなたさまは七百年こうして寂かに在ました。ご開山さまは、「<sup>あざけ</sup>ころあらん人はをかしく思うべし、嘲りをなすべし。しかれどもおほかたのそしりをかえりみずひとすじにおろかなるひとびとをころえやすからんとてしるせるなり」と<sup>おお</sup>仰せでございます。ありがとうございます。またご自分の「<sup>きょうぎょうしんしょう</sup>教行信証」に対して、仏教界を挙げて非難が起こることを予想しておいでました。

まことに<sup>ぶつとん じんじゅう</sup>仏恩の深重なるを<sup>ねん</sup>念じて、<sup>じんりん ろうげん</sup>人倫の<sup>は</sup>瞬言を<sup>あざけ</sup>恥ぢず。

ただ<sup>ぶつとん ぶか</sup>仏恩の<sup>おも</sup>深きことを<sup>じんりん あざけ</sup>念うて、<sup>は</sup>人倫の<sup>あざけ</sup>嘲りを<sup>あざけ</sup>恥ぢず

<sup>たりきえこう</sup>他力回向の<sup>しゅじょう</sup>仏法では、<sup>しゅじょう</sup>衆生の<sup>しゅじょう</sup>側の<sup>しゅじょう</sup>想いは大きなご恩かなということだけであるということが、旧来の<sup>ぶつとん</sup>仏教側には<sup>がてん</sup>合点出来なくて、逆にご開山さまを<sup>あざけ</sup>嘲るだろうとお考えでありました。それで、よしあしの文字を知らないような人々こそ、<sup>まこと</sup>真の<sup>まこと</sup>信心の人々であり、<sup>ぜん</sup>善悪の字ぐらい知っているという人々は他力のご恩が分からぬ、大それごとの人々であると仰せです。

ありがとうございました。<sup>おのれ むな</sup>己を空しくして<sup>おのれ むな</sup>仏恩に<sup>つか</sup>奉えるという道を教えて下さいました。大遠忌お待受けは、ご真影さまのご前の<sup>ひと ごと</sup>独り言でございます。なまんだぶ なまんだぶ

JASRAC 出 0808528-801

(勸 学)